

## おしえと社会の中道を行く

副住職の秋田光軌です。実に5ヶ月ぶりの「伝心」発行ですが、前号が出た直後の3月には先代内室の逝去、4月に住職の緊急入院など(幸い大事には至りませんでした)、この間も色々なことがありました。時の流れの速さを痛感しつつ、この一瞬々々を大事にして生きていかねばと強く思った次第です。

さて、去る7月3日には、一般社団法人「お寺の未来」が主催するセミナーに参加してきました。「これからの僧侶のあり方を考える」と題して、なんと博報堂の関西支社をお借りしての開催でしたが、同じ席になった方々が口を揃えて「仏教界や宗門の中だけに安住しては、良い僧侶は育たない」とおっしゃっていました。様々な社会の現場に向くなかで、人々の苦悩や喜びに宗教者としてどう寄り添うのか、その経験こそがこれからの僧侶に必須のものとなるだろうということです。

一方、宗教者として人々に寄り添う際には、「自宗のおしえを深く掘り下げ、理解していく作業が重要だ」とも言及されていました。仏教界の外に出た結果、ただ単に社会の価値観に順応していくだけでは、確かに宗教者と呼ぶことなどできません。「葬儀ができる」というような段階を遙かに越えて、仏教思想を自らの生き方にまで昇華し、社会に対して別の価値観を提示できる僧侶が求められているのでしょう。そのためには現場で宗教的経験を積むと同時に、これまで仏教が思想的にどう変化し、社会のなかで発展してきたのか、そして自宗はどの立ち位置にいるのかといったこともまた学んでいく必要があります。つまり、これからの僧侶は、教義と社会、学問と現場の「中道」を進むのです。

中道は、一般には「ほどほどであること」「中くらいであること」を意味しますが、仏教的に正確な意味とは言えません。仏教における「中道」とは、人間が定めてしまいがちな様々な二項対立、たとえば「現場と学問のどちらを取るか」といった問題設定の仕方に対する、根本的な否定を表しています。仏教においては、どんなに反対に見えるものも根底でつながっているのであり、現場とはある種の学問であり、学問とはある種の現場なのです。ですから僧侶も、ほどほどの現場、あるいはほどほどの学問のいずれかに収まるのではなく、本腰を入れて現場と学問の双方に取り組まねばならないでしょう。そして私自身も、そうありたいと念じています。

南無阿弥陀仏。



——はじめは、大蓮寺にどのような印象をお持ちでしたか。

大西「先代住職の頃から、毎年自宅にお参りに来ていただきました。父親と先代住職が話していた姿が記憶に残っています。現住職に代替わりして、年も近いので雑談で盛り上がりつつありましたが、大蓮寺には年1、2回伺う程度でした。当時は仏教に興味もなく、単なる習慣で足を運んでいただけ。住職の法話も『自分には関係ない』と、あまり響きませんでした。今思えば、壁をつくっていた気がします。」

——そうでしたか。そこからの転機はどういうものだったのですか。

大西「10年ほど前に父が亡くなり、またその後、母が末期ガンと診断されたことです。身近な人の老病死は、自分が根底か

ら揺さぶられる大きな経験でした。救われたいけれども、自分の力ではどうしようもない。限界を感じました。そのときはじめて、仏教って生き抜くための哲学でもあるんだなということが腑に落ちてきました。住職から大蓮寺や應典院の歴史も伺い、それまでは家のお墓にしか足が向かなかったのですが、お寺の境内全体に流れている物語を感じられるようになっていきました。」

——お寺や仏教に親しんでいくことで、生活に変化はありましたか。

大西「仏教では、過去も未来も今につながると思いますので、今何をやるかが大事なのだと気づかされました。阿弥陀様を信じて、お念仏とともに日々歩いていきたいです。会社で働いていた頃は締切りが近づくとイライラして、部下にきつく

あたり、笑顔もなかったと思います。あるお坊さんに『笑顔もお布施のひとつ』と言われて、最近にはにっこり笑う練習をしているんですよ(笑)。」

——とても大切な心がけですね。最後に、今後の抱負を教えてください。

大西「遅いスタートですが、今後は僧侶として自分なりに伝えられることを探してみたいと思っています。住職の徒弟の一人として、また今後は大蓮寺護持会でも会計監査を務めさせていただくことになりました。大役ですが、檀家としても、いっそうお寺に貢献していけたらと思っています。」

## 家族の老病死から出家を決意。

### 大西正彦さん(大阪府枚方市在住)

大西さんは、代々続く大蓮寺のお檀家さんであり、また3年前からは住職の徒弟として、浄土宗僧侶となるべく修行に励まれています。今は頻繁にお寺に顔を出されている大西さんですが、どのような経緯がそこにあったのでしょうか。今回、来山された折にお話を伺いました(文責/編集部)。



basic information

# 仏女、棚経を知る

今年もお盆棚経の季節が近づいてきました。日本の伝統行事である棚経への疑問でいっぱい「仏女」ナカムラに、またまた住職が語ります。

